

ヘロデ・アグリッパ1世が、ゼベダイの子ヤコブを剣で殺し、更に使徒ペトロも獄に入れ、過越祭が済んだ後に引き出し、処刑しようとしていたところに、主の御使いのおかげでペトロは獄から助け出され、兄弟たちにことの成り行きを話した後、どこともなく隠れてしまった。このヘロデ・アグリッパ1世が死ぬ時の話が今日のところである。これは紀元後44年の出来事である。

一方、ユダヤの国全体を襲った「大飢饉」のためにアンティオキアの教会から救援物資を持ってバルナバとサウロがエルサレムに来た(11章30節)後、その務めを果たして帰って行った(12章25節)ことが記されているが、この「飢饉」というのは、紀元後46年に起こったものである。つまり、時期から言ってもヘロデの死よりも後であり、書いてある文書の順番から言ってもバルナバとサウロの帰って行くのは後であるが、今日は、順序を逆にして、先ず25節から学んでいくことにする。

25節

「バルナバとサウロはエルサレムのための任務を果たし、マルコと呼ばれるヨハネを連れて帰って行った。」

「マルコ」とは、前回の「マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家」(12節)に出てくる人物。このマルコについては先週学んだ通り。

何故二人はこの「マルコ」を連れて行ったのかというと、コロサイの信徒への手紙4章10節によると、「バルナバのいとこマルコ」と、このマルコのことが紹介されている。つまり、バルナバと年は違うが「いとこ」という関係にあったので、それで一緒に連れて行ったのだと思われる。

ではここからヘロデの死についてのところに戻る。

20節

「ヘロデ王は、ティルスとシドンの住民にひどく腹を立てていた。そこで、住民たちはそろって王を訪ね、その侍従ブラストに取り入って和解を願い出た。彼らの地方が、王の国から食糧を得ていたからである。」

「ティルスとシドン」というのは、自治を許された自由都市であった。この二つの都市にヘロデがなぜ「ひどく腹を立てていた」のか、その原因や理由は一切知られていない。

「そこで、住民たちはそろって王を訪ね、その侍従ブラストに取り入って和解を願い出た。彼らの地方が、王の国から食糧を得ていたからである。」

ヘロデの治めるユダヤの王国からティルスやシドンに食料が援助されていたという。

これは先ほども見たように、11章28節で起こった「大飢饉」よりも前の話だということが、よく分かる。アンティオキアから助けてもらわなければならないほどエルサレム自身、ユダヤ自身が弱ってしまったというのではなくて、むしろティルスやシドンにどんどん食料を援助できていた時代、そういう時の話である。

「侍従ブラスト」については、何も分からない。

21-23 節

「定められた日に、ヘロデが王の服を着けて座に着き、演説をすると、集まった人々は、『神の声だ。人間の声ではない』と叫び続けた。するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。神に栄光を帰さなかったからである。ヘロデは、蛆に食い荒らされて息絶えた。」

「ヘロデが王の服を着けて座に着き、演説すると」。このときヘロデが着た「王の服」とは、ただの王の衣装ではなく、銀糸を織った服であったという言い伝えがある。当時、このように、皆の前で「演説」をするとき、場所は、野外の円形劇場であったよう。そこから想像すると、銀の衣をまとして舞台に立てば、その姿は春の太陽の光を浴びて銀色に輝いたようである。神々しさの演出である。だから人々は「神の声だ。人間の声ではない」と叫んだであろう。むろん、人々の言葉は、見え透いたお世辞の一種であるが、しかし、人の目を幻惑しようとする視覚に訴える演出にはまって「さながら神のようだ」と感心した人がいたとしてもおかしくはない。いずれにしても、輝く衣は神性の象徴として用いられる(ルカ9:28以下)。

当時、神であると称されていたローマ皇帝の前においては、ヘロデは小さな君主に過ぎないが、自分の領土ないではまるで神であるかのようにふるまっていたように思われる。

この時、まるで自分が神のようであるかのようにふるまい、それを言わせたヘロデとは違った言動がこの先の14章に記されている。バルナバとパウロがリストラでとった言動である。生まれながら歩くことができなかつた人をいやしたとき、人々は「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった」と言い、バルナバを「ゼウス」と呼び、パウロを「ヘルメス」と呼んだ。このことを聞きつけたバルナバとパウロは「服を裂いて群衆の中へ飛び込んで行き、叫んで言った。『皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。わたしたちも、あなたがたと同じ人間に過ぎません。…』」(8~15節)

バルナバとパウロは、神々になぞらえられて、いい気になったのではない。かえって、神であるかのように呼ばれていることに「服を裂く」行為と言葉を通し、それを否定したのである。

「撃ち倒した」と訳されている言葉(επάταξεν、エパタクセン)の原形(πατάσσω、パタスソー)は、前回の7節で、主の天使が牢の中で寝ていた「ペトロ

の脇腹つついた」の、「つついた」(strike, smite)と訳されているのと同じ言葉。とにかく「撃った」のである、主の使いが。ペトロの場合は救い出すために脇腹を「撃ち」、ヘロデの場合には滅ぼすために「撃った」ということになる。

その結果、「ヘロデは、蛆に食い荒らされて息絶えた」。

“蛆に食われて死ぬ”というのは、神様を冒瀆する罪人の末路に好んで描かれる描写である(イザヤ14:11、66:24。旧約聖書続編『マカバイ記二』9:4-10など)。

22節の人々の叫び、23節前半のヘロデの死については、ヨセフスの『ユダヤ古代誌』18:195-202、19・344-350、秦剛平訳参照)によると、ヘロデは54歳で死んだ。

このヘロデ・アグリッパ1世が死ぬと、再びユダヤもサマリアもガリラヤもローマの総督直轄の下に移る。

24節

「神の言葉はますます栄え、広がって行った。」

ここで「栄える」と訳されている言葉(ηύξαντε、ヌクサネ)は、例えば、洗礼者ヨハネが生まれた時、幼子がすくすくと「育った」(ルカ1:80)、あるいは主イエスがお生まれになった時、やはりルカによる福音書の2章40節でお「育ち」になったと訳されていた、もともと「子どもが成長する、育つ」と言う意味の言葉である。

「神の言葉」(ὁ λόγος、ホ ロゴス)は、生き物である。パウロはテモテへの手紙2章9節で、「この福音のためにわたしは苦しみを受け、ついに犯罪人のように鎖につながれています。しかし、神の言葉はつながれていません」と言った。「神の言葉」は生き物であって、たとえベダイの子ヤコブが死に、ペトロがいなくなっても、「神の言葉はつながれていない」で「育って」行くのである。

この「神の言葉」の持っている命と力というものを、ヘブライ人への手紙4章12節では「神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができる」と言っている。

「神の言葉」は、とりわけ人の「心の思い」を試し、これを刺し貫くような命と力である。だから、迫害してきたヘロデ王が死んだから御言葉が栄えたというだけではなく、もともとヘロデという人は、前にも言ったように触れたように、ユダヤ教に非常に熱心な王であった。律法を一所懸命守った人である。その意味で、旧約聖書の「神の言葉」というものについて彼は一応信仰を持ち忠誠を尽くしてきた人である。

ところが、そのヘロデが人々からへつらわれて“人間でない、神だ。人の声ではない、神の御声だ”と言われてもそれを退けない、むしろ喜んでいる、そういう「心」、これが今、神様から裁かれて一新されることによって、「神の言葉はますます栄えた」のである。

似たようなことが、この後パウロのエフェソ伝道の時にも出てくる。パウロはエフェソの町で3年に亘って一所懸命伝道をしたので大勢の信者が生まれた。ところが、あることからその信者たちは恐れを抱き、自分たちがまだ行っていた悪業を告白し、魔術を行っていた者もその魔術本を持ってきたという。使徒言行録19章17-20節。

「このことがエフェソに住むユダヤ人やギリシア人すべてに知れ渡ったので、人々は皆恐れを抱き、主イエスの名は大いにあがめられるようになった。信仰に入った大勢の人が来て、自分たちの悪行をはっきり告白した。また、魔術を行っていた多くの者も、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨てた。その値段を見積もってみると、銀貨五万枚にもなった。このようにして、主の言葉はますます勢いよく広まり一育ち一、力を増していった。」

生きている神の御言葉が本当に**「栄える」**、本当に**「育つ」**、本当に**「力を増していく」**のは、信者たちが、中途半端な信仰ではなくて、すべての悪やすべての迷信や、すべてのまじないを捨てて、あるいは、へつらわれて嬉しいというような中途半端な思いを捨てて、清い心、正しい心で御言葉を本当に受け止める時、その時、**「神の言葉」**は**「育つ」**のである。いよいよ**「栄える」**のである。